法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

田代安定の学問と資料

齊藤, 郁子 / サイトウ, イクコ / SAITO, Ikuko

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
32
(開始ページ / Start Page)
275
(終了ページ / End Page)
322
(発行年 / Year)
2006-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00015985

田代安定の学問と資料

齊藤　郁子

はじめに

田代安定は、廃藩置県の後に役人として沖縄に入り調査を行った。彼はキニーネの植樹をはじめとする植物学の分野にとどまらず、幅広い分野の記録を残した人物である。著書としては『沖縄結縄考』が長谷部言人の校訂で出版されたのみであるが、『植物学雑誌』『東京人類学会雑誌』等に数多くの論文を寄稿している。

田代は明治十五年から沖縄に入りその地を調査したため、その調査記録は時期的にも早い段階のものであり、その研究業績の水準の高さは夙に知られている。すでに田代に関しては、多くの人がその生涯、活動に注目し、言及している。主なところでは、田代の功績表彰記念碑が建立された際に刊行された『田代安定翁』（永山規矩雄［編］一九三〇）、雑誌『伝記』に掲載された「隠れたる植物学者

田代安定翁を語る」（松崎直枝　一九三四）、長谷部言人が校訂し出版した『沖縄結縄考』にある「田代安定氏について」（長谷部言人　一九七七［一九四五］）がある。田代の政策建議と思想については三木健「田代安定」（三木健　一九七四ａ）、「八重山近代史の一考察」（三木　一九八〇ａ）、「田代安定と近代八重山―辺境のいわゆる〝近代化〟をめぐって―」（三木　一九八〇ｂ）等がある。民俗学方面の研究に関しては野口武徳「田代安定」（野口武徳　一九八〇）があり、植物学研究の業績に関しては上野益三「田代安定の植物学」（上野益三　一九八二）等がある。これらによってすでに語りつくされた感があるが、本稿では、田代の修めた学問とそれが彼の残した資料へどのように反映されているかということについて考察してみたいと思う。田代の研究の様相をたどることは、近世末期の学問を基盤に近代の人間がいかなる知識を集積していったかの一端も知ることになるはずである。そこに見られる学問的意識とまなざしをたどっていきたい。

一．田代安定の略歴

ここでは田代安定の生きた時代、学んだ学問を中心にその略歴を記してみる（田代安定履歴書〔田代安定　一九二四〕をもとに作成した）。

一八五七（安政　四）年　現在の鹿児島市加治屋町に生まれる。

一八六九（明治　二）年　鹿児島の柴田圭三塾に入り普通学を学ぶ。
一八七二（明治　五）年　造士館に入学。フランス語の助教も兼ねる。
一八七四（明治　七）年　上京。田中芳男のもとで植物学を学ぶ。
一八七五（明治　八）年　内務省御雇・博物館掛となる。
一八八〇（明治十三）年　明治十四年開催の内国勧業博覧会事務委員となる。
一八八一（明治十四）年　天産物取調のため大島郡各島巡回。
一八八二（明治十五）年
四月七日　博物取調のため種子島出張。
四月十八日　農商務省から規那樹試植の目的で沖縄出張。宮古・八重山を経歴。
一八八四（明治十七）年　露国園芸博覧会へ派遣される。
一八八五（明治十八）年　開拓、旧慣制度改革の準備として八重山調査。
一八八六（明治十九）年
十一月二〇日　農商務省を辞職。
十二月二三日　帝国大学の嘱託により「南海諸島」植物及人類学上の調査。
一八八九（明治二二）年
一月十三日　帝国大学の嘱託により「沖縄其他南海諸島」人類学及植物調査。

五月二二日　帝国大学の嘱託により「南洋諸島」の人類学及び植物学上の調査。
七月十七日　東京地学学会より植物学・人類学の調査報告を嘱託。
八月三日　文部省の嘱託によりハワイの糖業、移民等について調査。

一八九〇（明治二三）年
五月三一日　農商務省の嘱託により「南海諸島」の植物調査。
六月二六日　農商務省農務局勤務（～翌年三月）。

一八九一（明治二四）年　横浜植木商会の嘱託により外国輸出用植物調査で国内経歴。

一八九二（明治二五）年　東京地学協会報告主任兼事務嘱託（～翌年四月）。

一八九五（明治二八）年
四月二日　陸軍省より雇員・混成技隊附を命ぜられる。澎湖島北志島の地理その他を調査し「検察法文」を陸軍省へ提出。
五月五日　澎湖島民政庁附を命ぜられる。
六月十八日　台湾総督府民政局・殖産部附を命ぜられる。

一八九六（明治二九）年
二月二三日　台中、台南管内巡回。
七月二四日　台湾総督府民政局技師に任じられる。

一九一一（明治四四）年　鹿児島高等農林学校の嘱託教員となる（〜大正五年三月）。
一九一五（大正　四）年
　二月二七日　依頼免本官。
　三月十八日　台湾総督府嘱託。
一九二四（大正十三）年
　十二月十五日　台湾総督府依頼嘱託を解かれる。
一九二八（昭和　三）年　逝去。
一九四五（昭和二〇）年　長谷部言人の校訂で『沖縄結縄考』が刊行される。

田代の生れた時代はまさに幕末で、彼の故郷・薩摩藩はもとより日本中が揺れ動いた時代である。戊辰戦争が終結した一八六九年、満年齢で十二歳の時、鹿児島の柴田圭三の門下に入り、ここで「普通学」を学ぶ。

語学に関しては上にも記したように、造士館に入学した後、助教も務めている。わずか十五歳ほどの年齢だが、いかに田代がフランス語に堪能であったかがうかがわれる。そして後年、ロシアで開催された園芸博覧会に派遣された際、ヨーロッパの学者たちと交流しているが、田代の語学力は若年のころからその片鱗をみせていたようである。

また、「普通学」というのは、田代自筆の「履歴書」（田代 一九二四）にある名称であるが、これはおそらく専門科目を学ぶその予科として身に付ける科目、といった意味合いのものと考えられる。明治五年の学制に先立つ明治三年の「中小学規則」に、「子弟凡ソ八才ニシテ小学に入リ普通学ヲ修メ、兼テ大学専門五科ノ大意ヲ知ル」とあり具体的な教科として、句読、習字、算術、語学、地理学、五科大意が挙げられている（倉沢剛 一九八九［一九六三］：三五頁［筆者注・漢字は常用漢字に改めた。以下同じ］）。

最初についた師の柴田圭三は「聞えたる仏語学者にして、応用博物学は勿論純正博物学にも造詣深く」（永山［編］一九三〇：三四頁）と評される人物である。[1] 田代が柴田塾に入ったのは「中小学規則」の公布される前であるが、田代もこの塾で、専門的な学問を修める前段階としての基礎的な学問を習得し、また本草学・博物学の分野も学びはじめたものであろう。

ここで一度、田代の研究に大きく影響していると思われる近世の本草学と博物学について整理しておきたい。

本草学というと、「本草」という字面から植物のみを対象にする学問と思われがちであるが、実際は植物・動物・鉱物等を広く扱う。中国から伝えられた「一木一草、路傍の小石といえども、人間生命や健康の保持、病気の治癒に役だつかどうかを大きなテーマとし、そのために、自然を調査し、動植鉱物の生態・形態・生産地などを正確に記述する」（杉本つとむ 一九八五：十六頁）学問が本草学

である。医術のための薬物研究が本来のものであるが、そこから出発して、薬物の同定のために漢学、国学の知識も必要とされ、場合によっては人々の生活とその物質の関わりを知るために方言や風習の聞き取りも行ない記録する。現在の文学・国語学・民俗学等々と多岐にわたる分野と関わる学問であった。やがて、享保のころに本草学のなかから物産の開発に関わる物産学が興り、それがさらに発展していわゆる「博物学」的な領域を発展させる。

「博物学」という用語自体は英語のnatural historyの訳語として使用されるが、日本の近世においては「博物学」という用語はほとんど使用されていない。明治以降に学術用語として使用され、近世の本草学・物産学・名物学について言及する場合、明治以降の「博物学」的な学問領域として「博物学」と称することも多い。ただし、漢語の「博物」は古代からあるがその意味としては「①広く物事に通じること…。②百般の事物。百科。」（角川漢和中辞典）であり、近代以降の「博物学」の意味するところとは異なる。

現在では、「本草学」と言う場合は薬学を主眼としたものを指し、「博物学」は自然科学として動植物、鉱物を記載・分類して研究する学問という区別をしているが、学問の流れとしては「…本草や物産などの実用本位の研究の上に立って、科学としての博物学が育ったというのが実情であろう。」と上野は述べており（上野　一九九一［一九八九］：二十頁）、決して別個の学問とは見なせない性格のものである。

田代の師・柴田圭三が修めていた「応用博物学」「純正博物学」という名称は白井光太郎による分類で、前者は江戸時代、「…従来在る所の本草学の外、汎く動植庶物の形状・名称・効用・来歴・産地等を講究する物産学、及び詩書を初として、文学・歴史に現れたる、物類の名称・形状・異名・方言等を講究する、名物学の起るあり、且、其講究の範囲を拡張するに従ひ、一部門・一部類に就き、深く推究するの必要を生じ、遂に各種の専門家を出し、従て、其著書にも、専門的の述作あるを見るに至れり」という段階を指し（白井光太郎 一九三四：二頁）、後者は明治以降の、いわゆる西洋における「博物学」を指すものである。そうすると、柴田圭三はまさに近世の本草学・博物学的な領域を修めた学者であるということができる。

また、田代の一八七四（明治七）年の著作である「甲川採薬記」の冒頭で、「…遠西之博物家大別此学（筆者注・物産学を指す）為三科曰動物学曰植物学曰鉱物学是也。今余之所主研究者。在植物学…」とあり、本草学から派生した「物産学」といわれる分野のうち、特に植物学にあたる領域を研究したと述べている。さらに、田代の自叙伝である「台駐三十年自叙史」（以下「自叙史」と記す）の序文に「我カ本草学ヲ少シ許学ビ置キシハ敢テ本草ヲ好ムニアラス只ダ之ヲ少ク知□居サレハ不便□□ナリ」とあり、本人の嗜好とは重ならなかった書きぶりだが、修めた学問を「本草学」と認識していたことがうかがわれる一文である。

田代の「甲川採薬記」にしても、その書名からして本草学のフィールドワークである「採薬」と銘

打ち、植物の名に対して「山枇杷（ヤマビハ）漢名未詳方言「スケマラ」」と、漢名や方言での名称にも言及している。また植物の採取が目的ではあるが、加羅国嶽に登った際、その頂上付近を描き、天鉾と称するものの周囲に無数の小石を積み上げてあるのはここに登ってきた人々が麓から携え、登りきった証に残したもので、各自の姓名が書かれており、田代もそれに倣ったと記してある。このように土地の風習といえる事象まで記録しており、当時における「採薬行」の様子がうかがわれて興味深い。

また、田代の生まれ育った薩摩は、博物学趣味の大名として名高い島津重豪の時代に本草学および博物学が隆盛し、幕末の島津斉彬の時代には西洋の科学技術導入を行ない、博物学も発展した。なお、重豪の時代に企画され沖縄とも関わりの深い『質問本草』は斉彬の時代にようやく刊行されている。薩摩藩の学問傾向として本草学および博物学の浸透は深かったと見てよいであろう。

なお、田代の著書「甲川採薬記」には、『質問本草』からの引用もたびたび見られ、若年の田代がいかに故郷薩摩の本草学・博物学の成果の中に過ごしたかがうかがわれるものである。

田代本人の認識としては、薬学に主眼をおく狭義の「本草学」にとどまらず自然科学としての博物学ひいては植物学を志向したと読み取れるが、本草学以来保持していた、研究対象である植物および植物の生息する土地への多方面への目配りという研究方法を確実に身に付けていたと考えられるのである。

二・青年期――植物学研究と南へのまなざし

先に述べたように、田代の人生と業績については多くの優れた論考があり、それら先行論考において参考にされているのが田代の自叙伝「台駐三十年自叙史」である。これは少年期から台湾生活へ入るまでを叙したものである。

「第一節　渡台動機ノ一」では、「我青年時夙ニ南海諸島経営ノ志アリ研学ノ余妙常ニ其地誌ヲ講究ス」と、早い時期からの南方への関心を述べるが、その志を惹起した素因として、旧藩時代、大島代官であった大伯父について触れている。田代からみると祖父の兄にあたる田代次兵衛は大島での任期満了につき帰郷する際、暴風のため無人島に漂着し、その後三十余年後にその島で没したと伝わったという。旧藩時代から捜索されてはいたようだが詳細不明のうちに明治維新でうやむやになり、その後軍艦で探検を行ったが成果はあがらなかったと記している。「其目指ス方位ハ沖縄、台湾近海方面ニアリ吾幼ニシテ傍ラ此捜究ノ志アリ」というように、大伯父が漂流したとされ、旧藩時代から探索の手を伸ばしてもなお未知の世界であった南方へと田代少年の意識は向いていったようである。

成長した田代は上京し、田中芳男の下で植物学を学び、やがて当時の内務省の管轄であった博物館掛として勤務することになる。

この田中芳男とは、シーボルトとの交流や『泰西本草名疏』の翻訳で名高い伊藤圭介の弟子となり、

医術、本草学、蘭学を学んだ人物である。師の伊藤圭介が蕃書調所出役を命じられたのに従い江戸へ下り、蕃所物産調所出役を命じられる。一八六七（慶応三）年のパリ万博へ、出品物の陳列と管理のため派遣され、帰国後は明治政府に出仕し、多くの博覧会の実務に関わり、殖産興業政策の推進に深く関与した人物である（小西正泰 一九九一：一六七～一七五頁）。

上野益三によると、田代は東京大学の前身である東京開成学校に入学したかったようであるが、家庭の事情のため博物局に入ったという。「…政策による所属の変更はあったけれども、博物局は、田中を中心にして、自ら定めた方針通り、博物学の仕事を着々と進めて、大いに成果をあげていた」（上野 一九八二：二七九頁）という場所であり、家庭の事情により選択肢が限られていた田代にとって最も希望に近い進路であったようである。

また、多くの博覧会に関わった田中芳男との繋がりから、田代は明治十七年、ロシアのペテルブルグで開催された園芸博覧会の事務官として派遣されることになる。この時田中から田代が推薦されたのは、日本で後進の指導をしなければならないという田中側の事情と、「植物ノ実地ニ熟通スル者貴下ヲ措テ亦他ニナシ」（「自叙史」）と、田代の才能が見込まれたことに理由があったようである。

このロシアでの園芸博覧会[2]のための洋行に付随して、田代は多くの経験を積むことになった。博覧会が終了した後も田代は同地に留まり、現地の植物学の大家・マクシモヴィッチの知遇を得た。このマクシモヴィッチは一八六〇（万延元）年に箱館に渡り十四ヶ月滞在して植物採集と研究を行ない、

その後横浜、長崎を中心に植物を集め帰国した人物である。田代が会った当時、すでに極東植物研究の第一人者であった（上野 一九八二：二八三～二八四頁）。

またロシアからの帰途、ベルギーに数日間滞在して園芸術を研究し、ドイツでは造林と園芸術を見学しており、立ち寄る先々で西洋の知識を吸収しようとしていた様子がわかる。またドイツのハンブルグでは植物学のレイヘンバック博士の薫陶を受けたことを記している。このレイヘンバックとは、千島樺太交換条約や領有問題を議論するなど、熱い交友があったようである。

この旅の中で、レイヘンバックとの議論同様に、国家的な問題を田代に意識させることがあった。

「巴里ヲ去リ仏国海岸伊太利国境ニ至ルノ途中汽車同乗中ノ田舎紳士吾ニ告ケ曰貴国ノマジコ群島（八重山、宮古諸島）ハ吾国占領ノ予定ナリト吾怫然答テ曰何故乎ト彼懐中セル新聞残ヲ出シ示テ曰コレ見ラレヨト当時清仏戦争ニテ台湾ハ「クルベー」提督封鎖中ナリ八重山島ヲ得テ海軍病院ヲ建設ノ方針ナリトアリ依テ其日報ヲ貰ヒ受ケ帰朝早々同諸島海防着手急務ノ建議書を提出ス」

（「自叙史」）

フランスが八重山に海軍病院を建設し先島諸島を領土とするかもしれないという強烈な危機感を抱き、帰国後すぐに田代は建議書を提出した。清仏戦争で台湾を封鎖していたフランスであれば先島にも領有の手を伸ばすことも容易に考えられるという、当時の田代の焦燥がうかがわれる。

これより先、田代は明治十四年には奄美大島、明治十五年には沖縄に調査に入っているが、八重山

に調査に赴き密度の濃い成果を残すのは帰国後の明治十八年である。田代が八重山に調査に入るいきさつとその後を「自叙史」では、

「時ノ工部少輔渡辺基氏平素我カ志操ヲ知ルノ故ヲ以テ感動一方ナラス即時意見ヲ採用シ内務大書記官西村捨三氏ヲ以テ俄ニ沖縄県知事ニ撰用ス西村氏壮年気鋭一通ノ意見書ヲ内務大臣山県有朋氏ニ提出シ吾ハ農商務省属ヨリ沖縄県兼務ト成リ八重山群島ニ在勤一ヶ年半此間ニ山縣内務大臣沖縄諸島ヲ巡視シ八重山島ニ滞在中吾ヲ其船ニ呼寄セ日記帳ヲ以テ踏査ノ実況ヲ開陳ス」

と記している。これが当時の政府内の実情をどれほど反映しているかはわからないが、この時は田代の建議に対し応えている形である。

田代にとって八重山の開発は「洋行前ヨリノ企志ニシテ這回ノ踏査ハ専ラ旧慣制度改革行政刷新ニアルヲ以テ」と「自叙史」にあるように、早い段階からの構想であった。この時田代の行った調査内容については「宗教、旧慣制度、租税法、教育制度、地方税基金源ト為ルヘキ熱帯植物ノ栽培奨励方法其他細点ヲ精査シ与那国島ヲ除クノ外ハ各群島ニ航渡して悉ク実地測量ヲ遂ケ初テ各島ノ面積周囲ヲ確定スルヲ得タリ」と本人は述べている。

ここでさらに詳しい調査内容として、「八重山島取調始末外篇」にある「八重山島取調条目」を挙げてみる（田代 一八九三。後掲「資料一」参照）。

これらは「氏自ら左記十六箇條を規定し、これにより調査を行つた」（永山 一九三〇：四七頁）と

いうことであるが、地理、社会、法制、風俗習慣、歴史、等々ありとあらゆる事象をカバーする調査項目である。この調査は、山野、海岸のあらゆるところを自ら廻り刳り舟で島々を往来し、時には腐水の沼沢に股まで浸かり測量するなどの困難な調査であったようだが、村々の高齢の翁媼から「古来天災地殃ノ形跡及ヒ当時救済ノ実況等ヲ詢質シ或ハ諸国□ノ交通上ニ関スル諸口碑及ヒ諸漂着人ノ挙動其他今昔ニ於ケル施政上ノ得失影響等ノ諸点ヲ問尋シ時ニ或ハ曠野磯濱ノ間ニ土民ノ訴情ヲ諦聴シ…」（田代 一八九三：四三頁）というように、地元の住民からの聞き取り調査もかなり綿密に行っていたようである。

この時の調査書は「復命書三十八冊（内各村細部統計書二十余冊）民家各戸ノ細別区画図、各島ノ測量図、開拓用著名原野ノ実測図ヲ添へ農商務省ト内務省ニ各一組ツヽヲ呈出ス」と「自叙史」に見え、質量とも膨大なものであった。

このように、田代は非常な情熱をもって八重山の開発を唱え、その開発の前段階としての八重山調査であったわけである。明治政府が沖縄―八重山を領有し開発するための調査であれば、ありとあらゆる分野にわたる調査を行ったのも頷ける。帰京後は農務局と山林局を兼務しながら八重山島の官制改革の建議案を数種作成し当時の閣僚全員に提出している。この事業への建議書が「八重山群島急務意見」であるが、結果的に田代の企画した八重山の開発は政府のいれるところとはならず、挫折する。旧慣は温存され、近代化からは遠ざかった。このあたりの事情を田代自身がどう書き残しているかを、

少し長くなるが挙げてみる。

「時ノ農商務大臣榎本武揚氏ハ平素我カ企志賛助者ノ一人ナルヲ以テ尤モ助力スル所多シ大山陸軍大臣亦コレヲ賛助シ殊ニマニラ煙草ノ移植急要ヲ主唱シ文部大臣森有礼氏ハ是等ノ革新事項ニ尤モ熱烈ナルカ故ニ我カ企志ノ成達ニ尽力尠カラス只伊藤総理大臣洋行ヨリ帰朝際ニテ嘗テ清国貴紳左宗覚□ト沖縄問題ニ付巴里会合ノ際内約ノ意趣ニ依リ公義上八重山島ヲ艶デヤカニ開発スルヲ得ストノ確執説ニ対シ山縣内務大臣、井上外務大臣（馨氏）ノ長州閣臣ハ我カ最大難関トシテ前ニ横ハリ極力此難関ヲ打破スルニアラサレハ畢生ノ大目的ハ成達シ難キ故ナルヲ以テ約半ヶ年間ヲ費テ猪武的運動ヲ継続ス其中間ニ在テ扇子ノ向ケ様ニ労心スルハ松方大蔵大臣ナリ曰ク宜ク内務大臣ノ諒諾ヲ得ヘシト山縣大臣ハ全般八重山島ニ於テ囚治監創設之内命アリ吾ハ其故ヲ以テ直接交渉ハ専ラ同氏ニ属意シ日ニ数回ノ訪問ヲ重ヌル事アリ同氏ハ此件ヲ警務局長清浦圭吾氏ニ委嘱シ吾カ復命書ハ清浦氏ノ手許ニ保管シ日々交渉ヲ重ネツヽアリ一日山縣大臣邸ヲ訪問シ外出中秘書官ニ一書ヲ渡シ内ニ詩一首ヲ封入シ置ク同公之ヲ開披シテ危険心ヲ引起シ松方大臣ニ仲裁ノ事ヲ委託ス吾ヲ呼来ル再四ナルモ数月間応セス終リニ臨テ面会ス極力懇諭ノ末時期未至ノ故ヲ以テ同年末竟ニ此運動ヲ停止ス偶農商務省ヨリ辞令交附ノ呼出状来着ス昇給辞令ナルヘキモ依然一属官タツヘキハ快シトセサル所ナルモ忍テ之ヲ受理セント欲シ松方大臣ニ其可否ノ指示ヲ仰クニ貴下ノ事ハ森文部大臣引受居ルヲ以テ宜ク謝絶スヘシトノ事ユヘ此時農商務省ヲ辞職ス」

（「自叙史」）

田代は建議書が容れられなかった当事者であるのだが、この問題に関しては「自叙史」が他人の目に触れることを想定して書かれているのか、あるいは田代の叙述の特徴か、冷静で客観的な記述に終始している。当時の農商務大臣・榎本武揚と、大山・森・松方らの薩摩藩閥は概ね田代を後押ししていたようだが、伊藤・山県・井上の長州藩閥は清国との外交上、八重山の開発には乗り出せないとしていたようである。ただ、山県は八重山に視察に訪れたこともあり、まったく無関心ではなかったようである。[3]

八重山開発をあきらめざるを得なくなった田代は農商務省を辞職する。松方は学界で田代の能力を生かそうと後押しし、森有礼は田代をやがては「島司」の地位にとの心積もりがあったようだが、田代本人の希望はあくまで政治の世界であり、内務省の役人としての勤務であった。だが田代の家庭には妻の病気という事情があり辞職した、と「自叙史」では記している。その後、森の配慮により「文部省嘱託」となり八重山へ再び調査に赴くのであった。

明治二五年からは東京地学協会の「報告主任兼事務嘱託」という肩書きで調査研究を行っている。この団体は現在の社団法人東京地学協会の前身で、外交官としてヨーロッパに駐在していた渡辺洪基、鍋島直太、長岡護美、榎本武揚が中心となり、ヨーロッパの王立地学協会にならい地学の発展と普及を主な目的として一八七九（明治十二）年に設立された。戦前までは、世界各地への調査研究・見学

旅行の実施とその成果を講演会や雑誌に発表する啓蒙活動、および地質図の刊行を行っていた。[4] 田代が嘱託となる前にも、明治二二年に帝国大学から南洋諸島の巡回を命じられた田代へ、植物と人類学の調査嘱託に対する費用をこの団体が支給している。

ここに勤めていた時、海軍次官であった樺山資紀に面会し、台湾領有を視野に入れて島情を研究する必要を説かれており、貸与された「台湾府志」を田代は熟読している。このような経験から台湾への関心を募らせ、やがて台湾領有の前後から、台湾での政策に関わっていくことになるのである。

三・田代の調査記録

田代の最初の沖縄入りは一八八二（明治十五）年、本格的な調査は一八八五（明治十八）年で、この時は八重山の重点的な調査であった。明治十五年の調査は、当時の上杉県令の視察に同行する形で行ったもので、「沖縄県先島巡覧日記」（田代 一八八二a）でその調査の様子を知ることができる。また、県令側の記録としても「上杉県令先島巡回日誌」に田代の名前が見える。そして、この上杉県令側の日誌の中に、「…先島巡回歴意見書ナルモノヲ草シテ贈与セリ輙チ左ニ掲載シテ日誌編輯ノ精神ヲ稗補セント欲ス唯其稿ヲ脱セサルヲ遺憾トスルノミ」（沖縄県沖縄史料編集所［編］一九八三：二五一頁）と前置きをして田代の「沖縄県下先島廻覧意見書」（田代 一八八二b）とよく似た内容を引用している。

この一八八二年から二度目に調査に入った一八八五年と翌一八八六年に書かれた田代の著述を見ると、極めて政策的な内容である。田代の沖縄関係の活動の中でも、この時期がもっとも政治的意欲に燃えていた時期と重なるので当然の帰結と思われる。それ以後、農商務省を辞職してからは学術的な内容のものが中心である。しかし、『日本園芸会雑誌』に寄稿した「園芸論」（田代　一八八八ａ）などを見ると、日本の植物を輸出して利益を得るにはヨーロッパの園芸を学び、当地の園芸の状況を知悉することが重要であるとする提言を行なっている。

こうしてみると、田代の知識は、つねに社会への貢献というところへ向かっているようである。田代にとって植物学は単なる植物の研究にとどまらず、輸出品としての物産の開発や都市計画とも関わる街路樹などの研究が主目的であったように思われる。

また、海外への渡航後は、その際の報告を各分野で行っている。植物学の分野は『植物学雑誌』へ、人類学的な分野は『東京人類学会雑誌』へと。海外渡航の機会が限られていた当時であるから、それによって得た事物は報告して学界へ寄与する義務があるというかのようである。

田代による民俗調査については先行研究でも常に触れられており、雑誌『東京人類学会雑誌』に掲載された論考については野口武徳の概説がある（野口　一九八〇）。だが、雑誌に発表された以外にも、刊行されていない「稿本」で調査記録として重要と思われるものもあり（後掲「資料二　田代安定著作目録」参照）、その一部を挙げる。

東京大学理学部資料室所蔵の「海南諸島調査書」と資料名の付された稿本類は非常に興味深い。この中の「沖縄県下沖縄諸島結縄算標本説明全」と「沖縄県下宮古列島結縄算標本説明全」は『沖縄結縄考』で、片仮名を平仮名に変更するなど細かい変更はあるが、内容はほぼ忠実に起こしている。

「沖縄県下諸嶋数標字譜全」は『東京人類学雑誌』第七巻七八号〜第八巻七九号「沖縄県諸島記標文字説明」と、同誌第八巻八二、八三、八五号「沖縄県記標文字説」の元となった資料と推測される。だが、記標の説明は稿本にはほとんど無く、一方、紙数に制約のある雑誌には記標の用例は抜粋して掲載されているので、この両方を併読するのが望ましいと思われるものである。

地域の祭祀に関わるものでは「沖縄島諸祭神祝女類別表」「沖縄島諸祭神祝女類別表　沖縄島祝女佩用勾玉実検図解　附祭具図解」がある。前者では間切の各村の神役の人数の調査である。資料には「ノロクモイ員数」とあるが、「ノロ」以外の神役も含めた人数である。例えば、資料冒頭の恩納間切恩納村の場合「四人」としている内訳は「ノロクモイ一人　タケモイシラシ神一人　根神一人　子ブ取神一人（男子）杓取り」である。

そして項を変えて間切の「神拝所」の数と名称を記録している。試みに『琉球国由来記』に記載のある御嶽名と付き合わせてみると、一致しないものが多い。御嶽名は外来者の田代自身で調べられる性格のものではないので住民からの聞き取りによって記録したと思われるのだが、名称が一致しないのは時代が下るにしたがっての変化なのか、ヤマトゥの役人には神への憚りがあって答えられなかっ

たのか、その理由の解明も課題となろう。正確で客観的といわれる田代の資料であるが、それゆえに問題をはらむ資料である可能性もここにみられるのである。

後者の資料では、各地のノロたちが所持していた玉、衣裳、什器等のスケッチと説明が記録されており、村落祭祀の物資の面での様相を見ることができる。とくに身につける玉の全体図と勾玉の部分の拡大図、それに保管容器がある場合はそれをもそれぞれ図にしている。玉の数や材質、色、石の斑点等、形状を正確に写し取ろうとするそのまなざしは、まるで花の蕊や形状などを細かく観察し植物譜に記載するかのようである。

これらの調査の年月日などは記載されておらず不明であるが、『東京人類学会報告』第二巻第十六号（明治二十年六月）には「雑記」として沖縄を調査中の田代からの通信として報告されている中に「…只ダ巫女服飾中曲玉ハ数多実検セシニ上好純萃ノ品往々目撃仕候…」（田代　一八八七：二三七頁）とあるので、明治二十年ころの調査資料の可能性もある。

言語に関するものとしては「海南諸島単語篇八重山之部」と銘打たれた資料がある。「歳時部名詞」「八重山列島人倫身体部名詞」「八重山列島普通形容詞」から成り、これらは「内地語」と「八重山島語」を対応させて記載している。なお、「八重山列島人倫身体部名詞」は「八重山島語」をローマ字で表記し、現地の言葉になるべく近く記録しようと努力している。

残念ながらこれにも調査した年月日の記載がないが、「日本海南諸島言語系脈区分比較図」という

資料には「明治廿一年七月一日　田代安定識」とある。帝国大学の嘱託として調査した時期の記録であろうか。

ただし、田代はフランス語に堪能であったが、言語学分野の学習歴は現在のところ不明である。しかし、『東京人類学会雑誌』第八巻第八五号に掲載の「鹿児島県下大島郡島雑辞」に「鹿児島県下大島郡島ノ土民語ハ嘗テ帝国大学ニ編輯シ納メ置キシ如ク…」（田代　一八九三ａ：二五六頁）という記述があり、「調査資料」として言語に関するものも帝国大学に提出していたようである。

残した言語資料には自ずと限界があるかもしれないが、「人類学上の調査」として言語の記録をしている点には注目したい。

これら言語資料をもとに、のちに『東京人類学雑誌』に掲載された「八重山群島住民ノ言語及ヒ宗教」と同内容の「八重山取調始末内篇」の言語と宗教の部分が纏められたと思われるのだが、現在確認できる東大所蔵の稿本は語彙に関する調査記録である。もしかすると現在未発見の資料も存在したかもしれないが、言語に関するまとまった田代の見解はこの論考でみることができる。なお、この論考中で田代は八重山の言語は日本語の系統に属するという指摘をしている（田代　一八九一：十六～十七頁）。

文学・芸能に関わる資料としては組踊本を筆写したものがある。これに関してはすでに二度刊行されており紹介もされているため（当間一郎　一九九六）、ここでは割愛する。

このように、部分的には刊行された資料もあるが、そのほとんどが「稿本」として残されており、雑誌等に発表されたものを補完する内容の記録であるものもある。田代の調査資料は現在散逸しているものも多いと言われるが、こういった稿本類を見ると、未発見の田代の資料にいっそうの興味が湧くのである。田代の事象への目配りの広さからすると、すでに失われたものの姿をとどめているのではないか、と。

雑誌に発表された田代の論文の中に「薩南諸島ノ風俗余事ニ就テ」（田代　一八九〇）というものがある。これは鹿児島県の中之島の調査報告で、内容は島に残る平家伝説、地理、言語、服飾、風俗、農具・日用道具、家屋等々、多岐にわたる。中之島の地誌ともいえるものである。この中で「木簪」について述べた部分があるが、ここではその形態、寸法、材質に言及し、木簪は男性が女性に贈り、女性はその返しとして赤布を貼った草履を贈る習俗を土地の古老から聞き取っている。さらに簪の材料となる樹木に関しても植物学の専門家らしく名称や植生についても言及し、鹿児島や八重山での使用例にも触れるという、多方面にわたる綿密な記述となっているのである。そして、衣裳に関しては、その寸法を各部位ごとに計測し袖や裾の形状を事細かに記録している。このような、事物そのものを正確に捉え、事物をとりまく環境や事象といった多方面への眼差しは対象が何であろうと共通している。この眼差しが、田代の研究と残した資料に共通するものであり、田代の研究の「方法」と見なせると思われる。これは田代が若年のころから修めた本草学―博物学の研究方法の特徴であり、田代は

これを非常に有効に活かしていたということができるのである。

なお、柳田國男が本草書を参照している点で、日本民俗学の原点の一つを本草学に求める杉本つとむの指摘（杉本　一九八五：二〇九頁）があり、近世期の国学者・本草学者菅江真澄の著作が今なお民俗資料として高い評価を得ていることと、田代安定の研究方法の正確かつ客観的な部分は、相通ずるものであるように思われるのである。

四．田代の結縄・記標研究と沖縄の数学史

田代の唯一の著書が、長谷部言人の校訂で世に出された『沖縄結縄考』であり、田代といえば結縄という図式を想起しがちである。しかし、今まで述べてきたように、決して田代は結縄のみに意を注いだわけではないのだが、その記録の細やかさや実物収集からしても、貴重な研究であろう。

田代は、民俗資料としての結縄＝藁算に着眼し、研究・収集していたと思われる。民衆の実用としての数値の記標であり、簡単な計算のみ行えるが目で見て解り、地域ごとの違いはあるがそれぞれが体系をもっていた。田代は計算道具と表意としての藁算についての資料を残しており、民衆の数学としての資料でもあったわけである。

須藤利一は、田代の調査・資料について「沖縄の結縄は…明治中期まで、この地方で広く使用されていた事実があるに拘らず、これに注意と深い関心を示した人々に乏しく、このまま過ごすときは、

あるいは全く忘れ去られてしまう怖れがないとはいえないのである。その盛行時に直接、結縄に関する調査を行ない、貴重な資料を残した」（須藤利一　一九七二：五頁）と位置づけている。田代の結縄に関する資料は帝国大学に提出され、それをもとにして後に長谷部の校訂で『沖縄結縄考』が刊行される。資料が保管されていたからということもあろうが、この書を世に出した長谷部はさすがに慧眼である。

また、田代の結縄に関する報告の中で注目すべきは、結縄には「指示」と「会意」という二つの性格があり[5]、過半は指示、つまり料数を表すもので、会意つまり意思の疎通のためのものは田代の調査時には「今この標格に属するものは沖縄県諸島にても漸く減滅して僅に八重山群島と他の諸島中陬僻の村落中に現存するを見るのみ。」（田代　一九七七［一九四五］：十一頁）とあり、また、指示と会意と両方が示されるものもあると指摘している。

田代の後に、沖縄の数学研究にたずさわった人々は数名出てくる。矢袋喜一は『琉球古来の数学と結縄及記標文字』（矢袋喜一　一九八二［一九一五］）で、藁算・スーチューマと、琉球国時代の算法の状況について研究し、須藤利一は主に八重山の藁算と、いわゆる「算法書」について研究した。沖縄における「数学」としての専門的な研究が田代の後の世代によって進められたことにより沖縄全体の藁算が見渡せるようになったが、その研究の嚆矢が田代であった。単独の著書として刊行はされなかったが、田代は実用としての記標である「せうちうま（スーチューマ）」についても報告を行って

いるのである。発表されたのは『東京人類学雑誌』第七巻七八号〜第八巻七九号「沖縄県諸島記標文字説明」と、同誌第八巻八二、八三、八五号「沖縄県記標文字説」で、報告としてはかなりまとまったものである。スーチューマも結縄と同様に調査し資料を残している点においても田代の着眼の良さがみてとれるのである。

また、一般的に結縄は計算道具および計算記録とみられており、田代より後の世代はその方面での研究であるが、前述したように田代はこれが数以外にも表意つまり物事の意味を象徴的に表すものであるということに目を向けている。これは田代が最初に言及し、その後は須藤利一が僅かに触れたのみで、あまり省みられていない点である。須藤は「結縄の話—主として沖縄の藁算に就て—」で、「沖縄の結縄中にも、嘗て意志を表はすものがあつたと聞いてゐる」（須藤　一九八二［一九四四］：二〇八頁）と述べているが、「沖縄のわらざん—八重山を中心として—」では「この他、田代安定のいう、いわゆる会意的の意味を持つ藁算、すなわち、単なる数量を示すものでなく、意志を伝達するためのものがあったというが、通行禁止・使用禁止・立入禁止などを意味する算以外には、この種の表示の性質からいって、その存在は考えられないし、筆者が探求した限りでは発見できなかったとしても、決して不思議ではないと思うのである。」（須藤　一九七二：二二頁）と述べている。田代と須藤の調査した年代の違いも、この「会意」の藁算をいかに捉えるか、捉えるだけの材料に恵まれていたか否かという点で記述に温度差がみられるのかもしれない。

田代の結縄・記標研究は資料収集とその原理の記録という基礎的な部分を押さえている。また、年代的にも比較的早い時期に行ったことも、廃藩置県以降急速に廃れていった藁算・記標の記録であれば貴重なものである。そして、これに目を留め調査した田代は、民衆の数と表意の世界として藁算とスーチューマを見つめていたということができるであろう。

おわりに

みてきたように、田代は少年期から本草学・博物学を学びその方法論を身に付け、上京してからは田中芳男のもとで植物学を学び、専門性を高めた。事物・事象を見る眼差しは全方位的であり、現代の学問領域を超える視野の広さである。

八重山開発の志は挫折したが、このために行った調査の項目の綿密さは、「開発」という名の経営＝支配を前提にしたものではあったが、残されている資料の質の高さは貴重である。だが、場合によっては注意を要する資料である可能性もすでに指摘した通りである。それでも、田代の資料の特徴は、事物・事象に対してあくまでも客観的であるということである。

野口武徳は「…田代は自己の自然科学の知識を駆使し、お役所の命とは言え、正確な記録にもとづく意見書を出すことに積極的であった。こんにちの白書などと称する調査と異なり、あの『職工事情』などにもうかがえるように、明治期の官庁の記録には、意外に正確で、現実をおおい隠すような点が

少ない記録があることと似ている。」（野口　一九八〇：十二頁）と述べているが、田代に関しては「正確な記録」を目指す精神は、日本の近世に培われた本草学・博物学の客観的にして多方面の正確な記録を目指すところにその源泉があると推測する。

結果的に田代の政策建議はいれられなかったが、沖縄の廃藩置県後の早い時期での調査であること、社会のありとあらゆる分野をカバーした調査であったこと、という点で、田代の調査報告は、「資料」としても高い評価がされていることに異論は無い。ただ、残念なのは、田代による大量の報告書が散逸してしまい、田代の調査の全体像が未だに完全には辿ることができない点である。

二〇〇四年、台湾大学で田代安定の未発見資料が大量に保管されていたという報道がなされた。[6] 三木健によると、台湾大学図書館の作成した資料リストのうち、各村から提出された「各村細部統計書」の冊数と田代の「自叙史」にみえる統計書の冊数がほぼ一致するという（三木　二〇〇四）。修復や公開に向けては長い時間が必要であろうが、ここの資料から、沖縄・八重山関係の資料と、台湾での田代の活動が明らかになるかもしれない。また、国内の各機関の資料保管室に田代の資料が眠っている可能性もあり、その発見も待たれる。さらに多くの田代の資料が世に出ることによって、今後田代の研究内容は一層明確になるはずである。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、沖縄県立芸術大学附属研究所の波照間永吉教授に御指導いただきました。記して感謝申し上げます。

注

(1) 田代 一九七七［一九四五］巻末の紹介には「応用物理学」とあるが、「応用博物学」が適当であろう。

(2) 上野益三は、「…この会合は、Congrès international de botanique et d'horticulture à St. Petersbourg, 1884. すなわち、植物学園藝学国際会議で、万国博覧会というような性質のものではなさそうである。」（上野 一九八二：二八三頁）と述べている。

(3) この山県の八重山視察については三木健の詳細な論考がある（三木一九七四b）。

(4) 社団法人東京地学協会ウェブサイトの「協会の紹介」を参照。

(5) 田代はこの「会意格」「指示格」の分類について、「…支那上代文字即ち大小篆の字格中にある資格を本標に借り移せしものにして、其当否如何は自ら知る能はずと雖も、暫く愚見の儘を述べ置きなほ他日更に校訂を加へんとす。」（田代 一九七七［一九四五］：十二頁）と記している。

(6) 二〇〇四年五月九日付『琉球新報』を参照。

引用・参考文献

上野益三　一九八二『薩摩博物学史』島津出版会発行　つかさ書房発売

上野益三　一九九一［一九八九］『日本博物学史』講談社

上野益三　一九九一『博物学者列伝』八坂書房

沖縄県沖縄史料編集所［編］一九八三『沖縄県史料』近代四　上杉県令沖縄関係資料　沖縄県教育委員会発行

沖縄大百科事典刊行委員会［編］一九八三『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社

鹿児島高等農林学校［編］一九三四『鹿児島高等農林学校沿革史』鹿児島高等農林学校

倉沢剛　一九八九［一九六三］『小学校の歴史Ⅰ—学制期小学校政策の発足過程』ジャパンライブラリービューロー・日本放送出版協会発行　日本放送出版協会発売

小西正泰　一九九一「殖産興業を支えた《博覧会男爵》——田中芳男」『科学朝日』［編］『殿様生物学の系譜』朝日新聞社　一六七～一七八頁

白井光太郎　一九三四『日本博物學年表』大岡山書店

杉本つとむ　一九八五『江戸の博物学者たち』青土社

須藤利一　一九七二「沖縄のわらざん—八重山を中心として—」『沖縄の数学』富士短期大学出版部　一～二三頁

須藤利一　一九八二［一九四四］「結縄の話—主として沖縄の藁算について—」『南島覚書』第一書房

二〇四～二二二頁

田代安定　一八七六「甲川採薬記」国立国会図書館所蔵

田代安定　一八八二a「沖縄県先島巡覧日誌」沖縄県立図書館所蔵（複写）

田代安定　一八八二b「沖縄県下先島廻覧意見書」沖縄県立図書館所蔵（複写）

田代安定　一八八七「人類学上ノ取調ニ付キ沖縄ヨリノ通信」『東京人類学会報告』第二巻第十六号　日本人類学会［編］第一書房　一九八〇［一八八七］二三七～二三八頁

田代安定　一八八九a「園芸論」『日本園芸会雑誌』第二～三号　日本園芸会

田代安定　一八八九b「我カ植物ヲ輸出セント欲セハ予シメ彼ヲ知リ己ヲ知ラサル可ラス」『日本園芸会雑誌』第七号　日本園芸会

田代安定　一八九〇「薩南諸島ノ風俗余事ニ就テ」『東京人類学会雑誌』第六巻第五五～五七号、六〇号　日本人類学会［編］第一書房　一九八〇［一八九〇］

田代安定　一八九一「八重山取調始末内篇」浦添市立図書館所蔵（複写）

田代安定　一八九三a「鹿児島県下大島郡島雑辞」『東京人類学会雑誌』第八巻第八五号　日本人類学会［編］第一書房　一九八〇［一八九三］二五六～二五八頁

田代安定　一八九三b「八重山島取調始末外篇」浦添市立図書館所蔵（複写）

田代安定　一八九四「八重山群島住民ノ言語及ヒ宗教」『東京人類学会雑誌』第九巻第九六号

日本人類学会［編］
第一書房　一九八〇［一八九四］二二九～二三二頁
田代安定　一九二四「田代安定履歴書」沖縄県立図書館所蔵
田代安定［著］　長谷部言人［校訂］一九七七［一九四五］『沖縄結縄考』至言社発行　ぺりかん社発売
田代安定　「台駐三十年自叙史」沖縄県立図書館所蔵
當間一郎　一九九六「組踊〔探義伝敵打〕の内容と価値」『沖縄藝能史研究会会報』第二二五号　沖縄藝能史研究会　一九一～一九二頁
永山規矩雄［編］一九三〇『田代安定翁』故田代安定翁功績表彰記念碑建設発起人発行
野口武徳　一九八〇「田代安定」『南島研究の歳月　沖縄と民俗学との出会い』東海大学出版会　三～一三頁
長谷部言人「田代安定氏に就いて」『沖縄結縄考』田代安定［著］　長谷部言人［校訂］一九七七［一九四五］『沖縄結縄考』至言社発行　ぺりかん社発売　一～十三頁
外間守善・波照間永吉［編］　一九九七『定本　琉球国由来記』角川書店
松崎直枝　一九三四「隠れたる植物学者　田代安定翁を語る」『伝記』第一巻第一号　南光社　一一二～一三一頁
三木健　一九七四ａ「田代安定」『伝統と現代　特集　日本フォークロアの先駆者』第五巻第一号（通巻第二五号）伝統と現代社　三一～三八頁

三木健　一九七四ｂ「山県有朋の八重山巡視と辺境政策―山県の《南航日記》と《復命書》を中心に―」『八重山文化』創刊号　東京・八重山文化研究会　四〇～五五頁
三木健　一九八〇ａ「八重山近代史の一考察」『八重山近代民衆史』三一書房　七頁～四三頁
三木健　一九八〇ｂ「田代安定と近代八重山―辺境のいわゆる〝近代化〟をめぐって―」『八重山近代民衆史』三一書房　六七頁～一三一頁
三木健　二〇〇四「台湾に田代安定の資料を訪ねて」『琉球新報』二〇〇四年五月十一、十二、十七日付に連載。
八袋喜一　一九八二［一九一五］『琉球古来の数学と結縄及記標文字』沖縄書籍販売社発行　緑林堂書店発売

参考ウェブサイト

社団法人東京地学協会（二〇〇一年五月三〇日）「協会の紹介」社団法人東京地学協会．二〇〇五年四月三〇日：http://wwwsoc.nii.ac.jp/tokyogeo/intro/shoukai.html

資料一　八重山島取調条目（調査項目のみを抽出した）

第一条　各島実地測量ノ事

各島ノ周廻里程、各村ノ距離検測、各耕地反別、各荒蕪地反別、各牧場反別　各著名山嶽高度、其他川溝、沼沢等

各港湾ノ検測、錨地ノ撰定、気象、潮候等

第二条　炭脈調査ノ事

炭脈ノ検索、炭層ノ性質及ヒ石炭ノ品質等

第三条　戸籍調査ノ事

各島現在戸数、人口、職別、生産死亡比較、五子已上多子者、六十歳已上長寿人、配偶者、缺婚者、独身者、免税人、納税人其他家族上一切ノ事項」祠社、舟舩、家畜現在数

第四条　地理調査ノ事

（一）諸耕地反別種類（宅地、畑地、田地、山、藍、芭蕉、苧麻、（貢布用）蘇鉄（備荒食品）敷

地等）

（二）諸牧場、原野、沼沢、廃地等ノ実況　諸川溝水脈等（幅員、水勢、水源、舟筏ノ便否等）

（三）村墟、墳墓（有主墓、無主墓、支那人墓、内地人墓、諸外国人墓等）

第五条　山林調査ノ事

林質、樹性、区画、保護上ノ旧慣制度及ヒ将来管理上ノ目途等

第六条　貢租制度調査ノ事

（一）人頭税賦課法、同等別、各人負担額其他ノ事項

（二）現品貢納ノ種類、性質及ヒ同史跡其他ノ事項

（三）所遣米（即地方税）賦課法、各人負担額、各年度増減比較其他民費上ニ関スル一切ノ事項

（四）貢租ト土地トノ関係、及ヒ未来ニ於ケル諸機密上ノ事項

第七条　村吏旧慣制度調査ノ事

（一）村吏ノ職別、禄高、年期、其他ノ事項

（二）村吏登庸法及ヒ昇進制度其他ノ事項

（三）三間切頭蔵元吏員及ヒ各村吏ノ権限其他ノ事項

第八条　旧慣諸例規調査ノ事

（一）旧琉球評定所諸諭達、村吏、人民風紀取締其他ノ事項

（二）罪人取扱及ヒ懲罰法等刑事上ニ関スル事項

（三）舟舩、禁木、牛馬、田、畑、取締等其他ノ事項

第九条　諸風俗習慣調査ノ事

（一）人種、言語、性情、行為、手芸其他智能上ノ部

（二）家倫、相続法、冠婚葬祭、其他儀仗上ノ部

（三）文教、交際法、村制、其他民度進化上ノ程度

（四）宗教、祭典、呪詛、妄念其他敬神上ノ部

（五）年中行事、（即チ稼穡、例祭日、暦事及ヒ遊興等ノ部）

第十条　史跡上ノ諸考証探査ノ事

（一）古来諸国トノ交通上ノ関係（支那、朝鮮、安南、マニラ等并諸漂着人ノ容貌、挙動、年代等）

（二）古来島民移遷上ノ形跡及諸村廃立等ノ事項
（三）天災地殃即チ大風、地震、洪水、海嘯、火山、蝗害、飢饉、流行病等ノ年月并被害程度其他ノ事項
（四）有徳者、忠臣、孝子、兇漢、謀叛、戦争其他ノ事項

第十一条　業務上ニ於ケル諸調査ノ事
（一）現品交換ノ組織并金銭通用上ニ於ケル考案
（二）物品貸借方法、及ヒ将来内地商人并各事業家ト島民間ニ於ケル金銭貸借取締方法等
（三）本島士族ノ適業及ヒ将来ニ於ケル授産事業ノ目途
（四）将来ニ於ケル島民風俗外誘影響上ノ諸考察

第十二条　植民、開拓上ニ於ケル目途予定ノ事
（一）土民耕地維持法、及ヒ其権利上ニ於ケル考察
（二）植民上ノ程度、人員ノ撰択及ヒ其緩急順序等
（三）山林、原野、其他地面借区人ニ対スル区域程度、及ヒ取締方法等

第十三条　将来殖産興業上ニ関スル目途ノ事

（一）軍艦用著名材樹（即チ「チーキ」マホガニー）等）移植用地撰定及ヒ其着手方法等）

（二）熱帯地方諸植物ニ於ケル将来繁殖上ノ目途

（三）茄韮、甘蔗、マニラ煙草等ニ於ケル繁殖上ノ区域及ヒ製糖機械場建設用地撰定等

（四）塩田及ヒ鞣皮業開設ノ用地撰定等

（五）製靛、織布其他各製造業ニ於ケル今後ノ予定

第十四条　物産調査ノ事

（一）普通物産ノ部（即チ米、粟、麦、稷、豆菽、蕃薯等ノ現産額、品質、適否及ヒ将来ニ於ケル目途）

（二）特有物産ノ部（即チ煙草、山藍、草棉、草抜、胡麻、菜種等ノ原産額及ヒ将来ニ於ケル繁殖上ノ目途）

（三）木材ノ部（即チ樹名、材質、産量及ヒ管理法等）

（四）水産物ノ部（即チ海参、真珠母、鱶鰭其他ノ産量品質及ヒ将来ニ於ケル管理上ノ事項

第十五条　農業調査ノ事

現用農器、耕耘法進化ノ程度、阡陌ノ区画法、慣手栽培品ノ種類、収穫ノ多寡、農家営生上ノ現況

第十六条　瘴癘表説実験上ノ事

（一）瘴癘毒ニ関スル島民ノ伝説、観念等

（二）旧来疫村（ヤケムラ）ト称スル諸地勢、水質及ヒ気候

（三）瘴癘毒即チ麻刺利亜熱ノ多キ理由及ヒ将来ニ於ケル駆除方法其他衛生一般ノ事項

資料二　田代安定論文・著作目録（二〇〇五年七月現在）

『沖縄結縄考』収載の藤田達彦氏作成の「田代安定論文著述目録稿」をもとにし、筆者の調査結果により改訂してある。「所蔵」の項の略称は筆者が確認した資料の所蔵元である。「国会」＝国立国会図書館）、「沖県図」＝沖縄県立図書館、「浦添」＝浦添市立図書館、「東理」＝東京大学理学部生物学図書室、「東大田中」＝東京大学総合図書館田中文庫、「×」＝不明・未確認。空白＝琉球大学附属図書館。資料が複写したものである場合は、（　）で括った。

年	論文・著作	掲載誌・出版者	所蔵
一八七四（明治七）	甲川採薬記（乾・坤）	稿本	国会
一八七六（明治九）	制靛草木概論（訳）	稿本	×
	糖蜀黍（訳）	稿本	×
一八七七（明治十）	『紀州採薬記』	内務省博物館	×
	甲川宝函	稿本	沖県図
一八七八（明治十一）	ラミーに就て（訳）	稿本	×
	読桑皮繊維説	稿本	×

年	論文・著作	掲載誌・出版者	所蔵
一八七九（明治十二）	オホバヤドリギ	『博物雑誌』（博物局発行）二号	国会
	黒檀の説		
	タカツグ		
	阿利襪樹之弁	『博物雑誌』三号	国会
	通脱木	『博物雑誌』四号	国会
	アシナガカブラ	稿本	×
	ヤクシマイモ	稿本	×
一八八二（明治十五）	沖縄鹿児島両県下幾那樹繁殖意見書	稿本	沖県図
同年八月	沖縄県先島巡覧日記	稿本	（沖県図）
同年十二月	沖縄県下先島廻覧意見書	稿本。「祭魚洞文庫」のラベルが見える。	（沖県図）
一八八三（明治十六）	鹿児島県草木譜	稿本	×
一八八六（明治十九）	幾那樹繁殖の説	『万年会報告』第八年第八号	国会
	八重山群島物産繁殖の目途	『万年会報告』第八年第九号～第十年第八号	国会
	［沖縄県下］八重山群島急務意見目録	稿本。原本は青森県立図書館所蔵。	（沖県図）
	八重山群島急務意見書	稿本（『伝承文化』七号に収録）。右の「目録」とほぼ同内容。	

年	論文・著作	掲載誌・出版者	所蔵
一八八六（明治十九）	八重山群島物産繁殖の目途	稿本（『伝承文化』七号に収録）。『万年会報告』掲載のものよりかなり簡略。	
一八八七（明治二〇）	海南諸島風俗説	『地質学会雑誌』十号（東京地学協会報告→地学雑誌？）	×
	人類学上ノ取調ニ付キ沖縄ヨリノ通信	『東京人類学会報告』二巻十六号	
一八八八（明治二一）	ゆのみねしだ新称（第二版）	『植物学雑誌』第二巻第十三号	
	沖縄県宮古島及沖縄島対訳方言集	『東京人類学会雑誌』第三巻二九号	
	海南諸島（新検出）植物雑説	『植物学雑誌』二六、二七、二八、二九号	
	琉球西表嶋古見村ノ土器	『東京人類学会雑誌』第四巻四〇号	
	日本海南諸島単語言語系脈区分比較図		東理
一八八九（明治二二）	「ナゴラン」ノ説	『日本園芸会雑誌』第一号	国会
	園芸論	『日本園芸会雑誌』第二号	国会
	「ナリヤラン」ノ説	『日本園芸会雑誌』第二号	国会
	園芸論・其の二　欧米諸国園芸社会ノ概況	『日本園芸会雑誌』第三号	国会
	我カ植物ヲ輸出セント欲セハ予シメ彼ヲ知リ己ヲ知ラサル可ラス	『日本園芸会雑誌』第七号	国会

年	論文・著作	掲載誌・出版者	所蔵
一八八九（明治二二）	日本産たんがら樹ノ説	『植物学雑誌』第三巻第二四号	
	海南諸島（新検出）植物雑説	『植物学雑誌』第三巻第二六号	
	（雑録）山茶花ノ産所	『植物学雑誌』第三巻第二六号	
	海南諸島（新検出）植物雑説（前号ノ続）	『植物学雑誌』第三巻第二七号	
	海南諸島（新検出）植物雑説（前号続）（ママ）	『植物学雑誌』第三巻第二八号	
	海南諸島（新検出）植物雑説（前号ノ続）	『植物学雑誌』第三巻第二九号	
	（雑録）沖縄桑	『植物学雑誌』第三巻第二七号	
一八九〇（明治二三）	太平洋諸島経歴報告　其の一	『東京人類学会雑誌』第五巻四八号	
	太平洋諸島経歴報告　第二回	『東京人類学会雑誌』第五巻四九号	
	太平洋諸島経歴報告　第三回	『東京人類学会雑誌』第五巻五〇号	
	太平洋諸島経歴報告　第四回	『東京人類学会雑誌』第五巻五一号	
	沖縄県八重山列島見聞余録	『東京人類学会雑誌』第五巻五二号	
	「ウケユリ」ノ説	『日本園芸会雑誌』第十六号	国会
	たもとゆり之説	『日本園芸会雑誌』第十八号	国会

年	論文・著作	掲載誌・出版者	所蔵
一八九〇（明治二三）	薩南諸島ノ風俗余事ニ就テ	『東京人類学会雑誌』第六巻五五、五六、五七、六〇号	
	太平洋諸島経歴報告第一回	『植物学雑誌』第四巻第三八号	
	太平洋諸島経歴報告第二回	『植物学雑誌』第四巻第三九号	
	太平洋諸島経歴報告第三回	『植物学雑誌』第四巻第四〇号	
	太平洋諸島経歴報告第四回	『植物学雑誌』第四巻第四一号	
	鹿児島県中之島ノ植物	『植物学雑誌』第四巻第四四号	
	鹿児島県中之島ノ植物（前号ノ続）	『植物学雑誌』第四巻第四五号	
	太平洋諸島経歴報告	東京地学協会。明治二三～二五年	東大田中　×
一八九一（明治二四）	沖縄県諸島結縄記標考	『東京人類学会雑誌』第六巻六一、六二、六四、六五号	
	北海道百合取調の記	『日本園芸会雑誌』第三一、三二号	国会
	「質問応答」に「問」を投稿	『植物学雑誌』第五巻第五七号	
同年十月	八重山島取調始末内篇	稿本。原本不明。	（浦添）
一八九二（明治二五）	サモア群島土人ノ風俗説	『東京人類学会雑誌』第七巻七〇、七一、七三、七四号	

年	論文・著作	掲載誌・出版者	所蔵
一八九二（明治二五）	「イソフジ」ノ説	『日本園芸会雑誌』第三四号	国会
	ムラサキナツフヂの説	『日本園芸会雑誌』第三九号	国会
	太平洋諸島経歴余報（続）	『東京人類学会雑誌』第七巻七五号	
	太平洋諸島土人器標品解説	『東京人類学会雑誌』第七巻七五～七八号	
	沖縄県諸島記標文字説明	『東京人類学会雑誌』第七巻七八号、第八巻七九号	
	海南諸島宗教考篇―祝女部即ち祭神職	『東京人類学会雑誌』第八巻八〇号	
	薩南中之島実地調査報告	『東京地学協会雑誌』	×
	台湾島事情一班	『東京地学協会雑誌』	×
一八九三（明治二六）	沖縄県記標文字説	『東京人類学会雑誌』第八巻八二、八三、八五号	
	日本百合花名詮	『日本園芸会雑誌』第四二、四三、四五号	国会
	鹿児島県下大島郡島雑辞	『東京人類学会雑誌』第八巻八五号	
	唐菖蒲ノ新変種	『日本園芸会雑誌』第四四、四六号	国会
	「たまごうり」と「ひめうり」は如何	『日本園芸会雑誌』第四五号	国会

年	論文・著作	掲載誌・出版者	所蔵
一八九三（明治二六）	園芸用野生植物論評	『日本園芸会雑誌』第四五、四六、四七、四九号	国会
	桜島産李各種之品評	『日本園芸会雑誌』第四七号	国会
	今井翁園生の石榴	『日本園芸会雑誌』第四八号	国会
	台湾島園芸植物	『日本園芸会雑誌』（？）	×
	八重山列島各属島の植物	『植物学雑誌』第七巻八一、八二号、第八巻八三、八四、八五号	
同年十二月	八重山島取調始末外篇	稿本。原本不明。	（浦添）
一八九四（明治二七）	八重山群島住民ノ言語及ヒ宗教	『東京人類学会雑誌』第九巻九六号	
同年二月	沖縄県下八重山島所見弁議	稿本。原本について記載無し。	（浦添）
同年三月	八重山島御料地設置上ノ性格弁議	稿本。原本について記載無し。末尾に品川弥次郎宛書簡。	（浦添）
一八九五（明治二八）	沖縄県八重山諸島婦人頸飾珠ノ説	『東京人類学会雑誌』第十巻一〇六号	
	澎湖島自生植物（第一報）	『植物学雑誌』第九巻第九九号	
	澎湖島自生植物（第二報）	『植物学雑誌』第九巻第一〇三号	
	（雑報）「田代安定氏の書簡」	『植物学雑誌』第九巻第一〇三号	

年	論文・著作	掲載誌・出版者	所蔵
一八九五（明治二八）	澎湖列島植樹意見	台湾総督府民生局殖産部第一巻第二冊目	×
一八九六（明治二九）	台湾生蕃所用品説明（雑報）	『東京人類学会雑誌』第十一巻一二二号	
一八九八（明治三一）	南部台湾の諸蕃族	『東京人類学会雑誌』第十四巻一四六号	
一九〇〇（明治三三）	『台湾街庄植樹要鑑』	台湾総督府殖産課	国会
	『台東植民地予察報文』	台湾総督府殖産課	東理
一九〇六（明治三九）	海南諸島宗教考	『東京人類学会雑誌』第二一巻二四五号	
一九〇八（明治四一）	南波照間物語（雑報）	『東京人類学会雑誌』第二四巻二七二号	
一九〇九（明治四二）	西表及与那国記聞（雑報）	『東京人類学会雑誌』第二四巻二七五号	
一九一一（明治四四）	『台東植民地予察報文第一輯（繊維植物部）』	台湾総督府殖産局	×
	『台東植民地予察報文第二輯（繊維澱粉及飲料植物部）』	台湾総督府殖産局	×
一九一二（大正元）	『台東植民地予察報文第三輯（油料及料鞣皮料植物部）』	台湾総督府殖産局	×
	『台東植民地予察報文第四輯（脂液料植物部）』	台湾総督府殖産局	×
	『台東植民地予察報文第五輯（事歴部）上	台湾総督府殖産局	×

年	論文・著作	掲載誌・出版者	所蔵
一九一二（大正元）	巻』	台湾総督府殖産局	×
	領台後に於ける熱帯植物の育成	『台湾農事報百号記念』	×
一九一七（大正六）	『台東植民地予察報文第六輯（事歴部）下巻』	台湾総督府殖産局	×
	『日本苧麻興業意見』	著者刊行	沖県図
一九二〇（大正九）	『台湾行道及市村植樹要鑑　上巻』	台湾総督府営林局	沖県図
	『台湾行道及市村植樹要鑑　下巻』	台湾総督府営林局	沖県図
一九二一（大正十）	『台湾造林主木各論　前篇』	台湾総督府殖産局	沖県図
	『台湾造林主木各論　後篇』	台湾総督府殖産局	沖県図
	『台湾造林主木各論　続篇上巻』	台湾総督府殖産局	沖県図
一九四五（昭和二〇）	『沖縄結縄考』（長谷部言人校訂）	至言社	
年代不明	沖縄組踊集―沖縄歴史小説集	田代筆写	東理
	沖縄県下宮古列島結縄算標本説明全	稿本	東理
	沖縄県下沖縄諸島結縄算標本説明全	稿本	東理

年	論文・著作	掲載誌・出版者	所蔵
年代不明	沖縄県下諸嶋数標字譜全	稿本	東理
	海南諸島姓氏録（首里各村人民姓氏名字表）	稿本	東理
	沖縄島諸祭神祝女類別表　沖縄島祝女佩用勾玉実検図解　附祭具図解	稿本	東理
	沖縄島国頭地方旧慣問答書第一冊	稿本	東理
	琉球国衣服制度記	稿本	東理
	海南諸島単語篇八重山之部	稿本	東理
	沖縄県本島図	地図。「明治十七年一月現在」	東理
	沖縄県取調附図		東理
	露都園芸博覧会行復命書	虫損激しく閲覧中止	沖県図　×
	駐台三十年自叙史		沖県図
	沖縄諸島植物譜　（一巻）巻ノ二、巻ノ五、巻ノ九	稿本（カーボン複写？）	沖県図